

文芸部雑誌

山田 遼

久しぶりでこの欄を担当することになった。医家芸術誌に初めて寄稿したのが、昭和五十年ごろだったから、もう三十数年になる。

「海と修羅」という原稿用紙一〇〇枚ほどのものを持ちこんだところ、長いので二回に分けてほしいといわれた。次回の発刊が来年だから、それでは困るといったところ、編集の小笠原君がいろいろ骨を折ってくれて、結局まとめて掲載されることになった。

あとで文芸部委員の高橋有恒さんから、小笠原君に感謝なさいといわれた

ものである。

あの頃は高橋さんの他に、中谷富次郎さん、森迫健一さんなど腕利きの書き手が揃っていて、医芸文芸部はいつも活気に溢れていた。

編集長の椎津虚彦さんが大の世話好きで、何かにつけて道玄坂裏の椎津耳鼻科に集まり、そこから百軒店の飲み

壮大な楼閣を築く

一塊の土壌たらん

屋や、丸山町の座敷へくり出したものだった。

当時の文芸特集号は、必ず医系の作家との座談会が企画され、なだいなだ、加賀乙彦、藤枝静男、渡辺淳一などと交した座談会が印象に残っている。

小谷剛の時には、どうしても行けないと言われ、高橋有恒さんと二人で、三重県の四日市まで出向いて対談した

ものである。

とにかくこの三十年で、古い文芸部員はほとんど鬼籍に入り、二千人以上だった医家芸術の会員数は約十分の一に激減してしまった。一つの時代が終わったような気もするが、文芸というもの、人間社会のある限りは存続する筈である。

しかし明治の開国から始まった小説という散文による表現様式は、本邦においてはまだ発展途上といえよう。また標準語と呼ばれる人工的な日本語も、ようやく社会に定着したばかりである。だから真に芸術の名にふさわしい文芸作品は、これから世に現れてくるのだと思う。

果たしてそれに遭遇出来るかどうかわからないが、我々のささやかな創作活動が、その壮大な楼閣を築く上での、一塊の土壌になれば幸いだと考えている。

文芸特集号 執筆者一覧

- 天瀬 裕康 (1931年) 〒739-0605 大竹市立戸 2-3-8 (内科)
- 小川 再治 (1926年) 〒739-0605 狛江市猪方 3-16-18 (障害児心理学)
- 小川 昭子 (—) 〒739-0605 狛江市猪方 3-16-18 (小児科)
- 白矢 勝一 (1947年) 〒187-0041 小平市美園町 1-4-12 (眼科)
- 陶 易王 (1931年) 〒272-0825 市川市須和田 2-15-8 (外科)
- 豊泉 清 (1931年) 〒739-0605 大竹市立戸 2-3-8 (産婦人科)
- 浜名 新 (1939年) 〒167-0054 杉並区松庵 2-11-40 (内・脳神経外科)
(新村富士夫)
- 藤倉 一郎 (1932年) 〒364-0002 北本市宮内 1-90-2 (循環器科)
- 村山 正則 (1926年) 〒711-0906 倉敷市児島下の町 2-12-2 (外科)
- 山田 遼 (1928年) 〒177-0051 練馬区関町北 1-12-2 (整形外科)
(山田新太郎)
- 吉元 昭治 (1931年) 〒739-0605 大竹市立戸 2-3-8 (内科)

第 38 卷 11 月号「文芸特集号」の執筆者は 44 人も

上記執筆者のほか、懐かしい方々のお名前がずらり (編集後記参照)

藤倉	谷口	竹ノ谷	笠井	吉岡	田村	望月	越智	長谷川	藤田	後藤	野呂	加藤	樋口	松本	沼口	豊泉	柘植	鈴木	形浦	村山	木原	石田
一郎	謙	正	忠文	信	豊幸	良夫	淳三	誠美	尚男	晋	みち江	晃	潔	順弘	満津男	清	愛弥	玲之	昭克	正則	安比古	行仁
一六	一四	一一	〇九	九六	七二	五九	五三	五〇	四七	四四	四三	三八	三六	三二	二八	二二	二〇	一四	一二	一〇	八	六
蒲山	天瀬	吉村	根津	有吉	蒲山	船越	藤井	岩間	陶	山田	原	後藤	西郊	中河	松本	齋藤	山口	市村	高橋	平野		
久夫	裕康	外茂	輝	紀子	久夫	正也	威之	哲郎	易王	遼	トミ子	たづる	文夫	久仁子	正美	典彦	康徳	信山	通	春雄		
三五	五二	三三	二六	二六	二四	二九	二二	二〇	一九	一八	一七	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	一〇	一八	